

い。

応仁の乱の緒戦に次ぐ戦鬪に馳せ参じた将士の名の中に、三宅主計扶朝と赤木丹後守勝重がある。三宅氏は穴見城主、赤木氏は中ノ郷城主と伝え、赤木氏は後に水生山城に籠城している。先に触れた中沢内蔵之助・栗坂主水・篠部伊賀守の名も、ここに加えなければならない。野田合戦の田結庄是義の与力被官としては、上山平左衛門尉・岡部大勝・成田靱負亮・赤部悪右衛門・津田伊助・村尾伊右衛門・村尾平三・鳥羽大炊・山崎左門・岸田蔵大夫・岸田五郎太・岡部藤蔵・大隅玄番・寺谷孫助・浜瀬兵衛・浜源助・大谷一馬・福丸外左衛門・成田是繁・福丸定景の名がある。

これらの中で、史料的に明証のあるのは大隅玄番で、六地藏の河本家文書中の「大隅玄番屋敷」がそれである。この屋敷を天正九年（一五八一）、野田庄の荒地打開の功によって鈴木三郎左衛門が百姓頭に任命されるときに入手している。欠所地となった大隅の屋敷地を、あらたに豊岡城主となって入部した宮部善祥坊継潤が欠所地処分権を行使して、鈴木に与えたものである。恐らく大隅玄番は、野田合戦か、秀吉の但馬進攻に当たって戦死するか、没落したものであろう（写133参照）。

豊岡の柳行李の創始者は五荘地区森津の成田広吉だといわれるが、山名の陪臣の子孫だと伝えていることから、あるいは田結庄是義の被官・成田靱負亮の家系と関連しているのかも知れない。

この他の国人たちの名が、全く架空であるとは言い切ることとはできない。土地の伝承の中には、たしかな核となる話に肉づけされている場合が多いからである。

第五章 中世の農村と宗教

第一節 中世の仏教

中世の石造遺物 市内に残る中世のものと見られる石造遺物は、次表のように層塔・宝篋印塔・石幢・石像を主とする。そのすべてが仏教に関わるものであることは、当時の石造物の建立動機や今日に至る保存

事情から当然である。層塔・印塔は中世以前の寺院仏教に結びつくものといえるもので、寺の大檀那ともなる特権階級のものであるのに対して、石幢・石像などは寺院とは関わりのない庶民仏教ともいえる民間信仰を基盤とする。前者は個人の供養塔または墓標の意味を持ち、後者は地藏信仰と結びつくものが多い。

鎌倉期までの石造遺物は全国的にも稀少で、市内の中世石造遺物も時代的には鎌倉後期以降のものとしていられる。

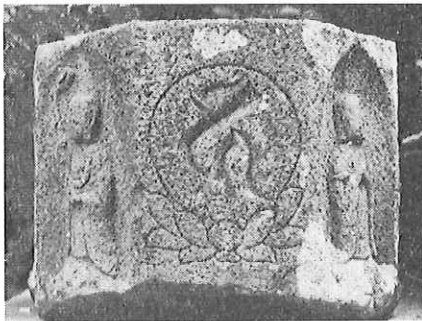
日撫地区の宝篋印塔は田結庄是義（天正三年戦死）の、新堂地区の印塔は栗坂主水（同年戦死）の、それぞれ供養塔と伝えられるが、ともに南北朝後半期のもものと見られる。気比地区の白山神社の印塔は、鎌倉時代初期に斬られた越中次郎兵衛盛継の供養塔といわれるが、やはり南北朝の作と見てよい。



(右) 写116 応永18年(1411)の板碑(妙楽寺地区・妙楽寺)



(左) 写117 五輪比翼塔浮彫り板碑(中陰地区)



写118 八面八地藏重制石幢の幢身
(正法寺地区・法国寺)

仰、下宮の地藏像とともに従来から信仰されていた古い石像を札所にあてたものであろう。
正法寺地区の法国寺には重制八面石幢の残欠がある。幢身

いずれにしても、その地に伝わる武将の悲話を古い印塔に結びつけたもので案外、新しい時代に発生した伝承であろう。
石碑や石幢の六地藏は近世中期に入って、六体六地藏の盛行に引きつがれるが、年代的には近世初期のものを含んでいるかも知れない。

津居山の浜地藏は、但馬六十六地藏五十七番札所である。但馬六十六番の復興は宝暦(一七五一)のころといわれるから(日野西真定『日本における地藏信

表28 市内・主要中世石造物表（上田庄三『豊岡市の石造遺物』）

No.	所在	種類	高さ cm	様 態	刻字など（備考）	年代（推定）
1	野上・帯雲寺	宝篋印塔	52	相輪欠失	玉殿理芳	天文6年（1537） 2月18日
2	江野・徳養寺	〃	115	相輪一部欠失		（室町中期）
3	九日市上ノ町・勝妙寺	〃	95	塔身欠失		（南北朝）
4	中央町・田中寺	〃	51	相輪・塔身欠失		〃
5	金剛寺・金剛寺	〃	220	相輪一部欠失	（市指定文化財）	（南北朝後半）
6	正法寺・法因寺	〃	34	基壇だけ		（南北朝）
7	気比・白山神社	〃	145			〃
8	佐野・観音堂	〃	108	相輪欠失 隅飾欠損	（市指定文化財）	（南北朝後半）
9	〃	〃	87	相輪欠失		（室町後期）
10	日 撫	〃	234		（市指定文化財）	（南北朝後半）
11	新 堂	〃	120	塔身欠失 宝珠は別もの		〃
12	九日市上ノ町	〃	117	相輪欠失		（室町期）
13	下 宮	〃	66	基礎・笠は別もの		〃
14	奥 野	宝篋印 塔 幢		各残欠を組合わせ	（石幢は四面十三仏）	〃
15	〃	石 幢（重制）	85	竿・宝珠を欠失 五輪残欠と組合わせ	（六面六地蔵）	〃
16	九日市中ノ町	〃	72		〃	〃
17	田結・西光寺	〃	55	竿・笠・宝珠を欠失	〃	〃

18	今森	" (")	27	幢身と笠だけ	"	"
19	中谷	" (単制)	53	幢身だけ	"	"
20	正法寺・法因寺	" (重制)	35	"	(八面八地藏)	(南北朝)
21	津屋山・八幡神社	層塔	423	相輪欠失	(九層) (只指定文化財)	(鎌倉後期)
22	八社宮	"	146	上層部欠失		(室町期)
23	九日市中ノ町・妙経寺	複合石塔	133		(開山供養塔)	応永12年 (1405)
24	津居山	地藏像	124		(但馬六十六地藏57番) (通称・浜地藏)	(伝・鎌倉末期)
25	下宮	"	117		(" 61番)	"
26	妙楽寺・妙楽寺	板碑	138	梵字・蓮台・地藏像		応永18年 (1411) 4月
27	新堂	石碑	178	自然石	法華経一千部供養塔 (金剛界五仏)	応永24年 (1417)
28	岩俣	"	65	"	(一面六地藏)	(室町期)
29	下宮・久々比神社	"	110	"	"	"
30	金剛寺・金剛寺	塔婆	88	笠一部欠損	(阿弥陀坐像・キリーク)	"
31	中陰	板碑	44		五輪比翼塔浮彫り	"
32	日撫	石籠	50		"	"
33	"	"	70		五輪塔浮彫り	"
34	法花寺・公民館	"	33	屋根欠失	五輪比翼塔浮彫り	"
35	口岩井・墓地	五輪塔	45 35 40	3基建立各一石		"

残すだけであるが、重制で八面八地蔵石幢というものは希有である。宝篋印塔の基壇部も残っている。格狭間の三茎蓮と開花蓮を配した複合近江式裝飾文もまた、希少である。ともに南北朝末期・至徳二年（一三八五）ごろの制作と推定される。法国寺は元文四年（一七三九）に瀧地区の弥勒寺の末庵として出発しているので、これらの遺品は他所から移されたものか寺地が本来、墓地などの供養の場であったのかも知れない。

金剛寺（金剛寺地区）の宝篋印塔は相輪部の伏鉢を失っているが元来、総高二四〇センチの八尺塔として建立されたもので、日撫地区の印塔とともに南北朝後半期のものとしては極めて珍しい巨塔である。

鎌倉時代後期のものとしては、津居山地区の八幡神社境内の九重塔がある。三重の基壇の上に立つ、花崗岩製のこの塔は、現在は相輪を欠くが、完全な総高は五一〇センチで、十七尺塔として造立されたものだという。塔身に力強く刻まれた梵字や、各層の軽妙な反りなど意匠にも優れた統一を見せた逸品である。

八社宮地区の層塔は、南北朝争乱時の戦死者の供養塔と伝えている。

佐野地区の雷神社裏山の観音堂の二基の印塔は、一基が南北朝後半、別のものは室町時代後期で、ともに相輪部を欠失している。前者の塔身が種子（梵字）と像容を混用する折衷式であることと像容に九面観音像を配している点で、後者が室町期の遺例としては九面観音を含む像容四方仏を配しているのと合わせて、ともに貴重な遺品である（田岡香逸『石造美術』他・倉橋但斉『但馬の宝篋印塔』）。

このように比較的数量多く残された例から、市内を含む但馬地方の中世史における政治的・文化的位置の高さを評価することができる。ただ、文書・仏像・建築物などちがって、路傍の野仏の類は保護面でも見逃されやすい。それが一見、美術的・学術的価値を認めることのできない石造物であれ、中世の遺物であるというこ

との歴史的重みは現代では極めて貴重なものである。

時宗の展開

後述するように、鎌倉時代に一遍の開いた浄土教の一派を時宗という。一遍は他力念仏の確信を深めて、死に至るまで全国各地を念仏遊行した。但馬に入ったのは弘安八年（一二八五）のことである。但馬国の「くみ」という所の海から一町余りへだたった場所に道場を設け、教化に当たった。これに触発されて、但馬にできた道場の中の一つが八条地区九日市上町の西光寺である。

西光寺は元享元年（一二三二）、一阿澄道が建立した。一遍入但後、約三〇年後である。江戸時代中期の天明年間（一七八一〜八八）には、塔頭に養寿庵・濟藏主・西ノ寮・小徳阿弥・大徳阿弥・幸技坊・長善坊の七つを有し、末寺に観音寺・満泉寺・十王寺の三ヶ寺を数え、円山川流域における時宗教団の拠点となった。

寺蔵の一遍上人像は、西光寺成立の時期に近く作成されたもののように、勸進帳と念仏札を携えて念仏遊行し、宗教的感興にまかせて踊念仏を進めた一遍像が描かれている。



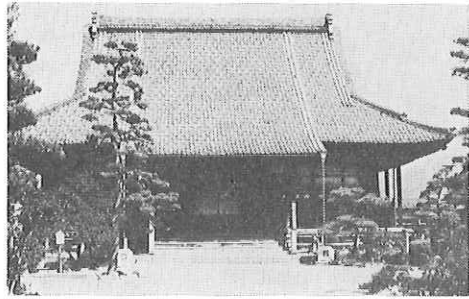
写119 一遍上人絵像
(市指定文化財・南北朝時代) 138cm×55cm
(西光寺蔵)

『但馬国太田文』によれば、上賀陽庄は南北に二分され、それぞれに地頭が任命されている。この南上賀陽庄の念阿という人物は、庄内で田を四反と畑六反余、計一町余の土地を所有している。他の地にも田畑を持つていたのかも知れず、おそらく村でも上流に属する人であったろう。

「念阿」というのは「念阿弥陀仏」



写120 福成寺（出石町内町）



写121 光行寺の現在の姿

の略で、時宗に帰依して信心が治定した信者に与えられる法名で『時宗過去帳』に記入されるものであったから、時宗に帰依した階層には、このような村の有力層がいたことがわかる。

真宗教団の
成立 南北朝のころから、念阿のような村の有力

農民層の指導で、「惣」という自治組織が結成され、この「惣」の寄合の場に食いこんだのが浄土真宗である。促進されたことは後に述べ

あった。浄土真宗は親鸞に始まるが、但馬の布教活動は興正寺系によって展開し、促進されたことは後に述べる。

奈佐地区の福成寺地区内の矢次山中腹・字祇山ぎさんには、かつて福成寺という寺があった。僧・行基の開基と伝え、初め真言宗であったが正平年中（一三四六〜七〇）、善証が本願寺・経覚に帰依し善正坊覚証と名乗り、浄土真宗転宗第一世としている。在地領主・奈佐氏の信仰厚く、一〇〇〇石の寺領を得たというが文明年中（一四六九〜八七）、覚証から七代目の知教が興正寺の蓮教の弟子となって、浄土真宗興正寺派との深い関わり



写122 照満寺の阿弥陀
絵像裏書き 永正12年
(1515) に下付された。



写123 円空の祈願文と摺り仏 (光行寺本尊胎内文書)
(市指定文化財・光行寺蔵)

をもつようになった。このころ、鳥羽村(後に福成寺村となる)の郷土・石見備前(石谷城主と伝えられる)と争論し、最初は出石町寺屋敷に移ったと伝えている。

光行寺は円山川廃川に沿った滋茂町の地域にあるが、もとは五荘地区高屋にあって、光妙寺という真言宗の寺であった。浄土真宗への転宗は弘安年中(一二七八〜八八)とも伝え、高屋に配流された雅成親王の皇子が光妙寺に入って浄円と名乗り、上京して円空に師事して改宗したものである。光行寺には、大永六年(一五二六)八月九日付の山名堯威、同八年十月一日付の山名祐豊の文書があるが、ともに山科本願寺末とある。しかし、手次ぎは興正寺であつたらうと考えられ、その時期も福成寺と同じく文明年中と推定されている。

港地区津居山の照満寺も、もとは真言寺院で文明十年(一四七八)に住持の源広吉(後述する源国吉の末葉)が本願寺・蓮如に帰依して改宗、浄信と号したと伝えているが、永正十二年(一五一五)下付の開基仏絵像裏書には「興正寺末」とある。

上陰の信楽寺は永正八年、浄土真宗に改宗し同年十一月、絵

像を下付されている。泉町の徳証寺は、もと下陰にあり明応二年（一四九三）に浄土真宗に移り、永正六年に絵像を受けた。これらの絵像下付年月は、それぞれの寺が浄土真宗道場として本山認承のもとに成立した日づけと見てよい。また地域の同宗寺院が興正寺系ばかりということは、後で触れるように極めて特異な事例である。

天文十五年（一五四六）四月六日、興正寺の蓮秀（蓮教の子）が生野銀山に泊り、九日まで滞留、十日には出石の福成寺に来て二日留まり、十二日の午後に光妙寺に到着、十六日まで滞在した。その日の朝、光妙寺を出て丹後の久世戸に至っている。但馬の浄土真宗寺院と興正寺の当時の関係がうかがわれる。

白紙の御影

福成寺襲藏の親鸞上人絵像は、但馬国興正寺門徒の惣伝として下付されたもので、光妙寺・金蔵寺（生野町）・福成寺の三ヶ寺が一ヶ月を上・中・下の一〇日ずつに分けて、持ち回りで給仕していたことがあった。いつしか光妙寺と福成寺の十五日ずつの給仕となり、月初めは福成寺、後の十五日は光妙寺のものとして、これが恒例となった。その受け渡しの場所は、出石・豊岡街道の中間点・清冷寺村五条の上茶屋だったという。ところが、福成寺が光妙寺に御影を渡すと絵像は白紙と化し、光妙寺から福成寺に送達すると、たちまち親鸞の尊像が現われる。この絵像は福成寺一ヶ寺のものとなり、光妙寺には別の御影が下付されることになった。「白紙の御影」と呼ばれる伝承が、これである。

この伝説は、但馬の初期真宗教団の中心が金蔵寺・福成寺・光妙寺であり、その勢力関係において、まず金蔵寺が脱落し、福成寺の勢威が残る光妙寺を圧したことを比喩している。



写124 祥雲寺跡の墓地（祥雲寺地区）

各派の禪寺

禪宗は鎌倉初期に臨濟宗と曹洞宗、江戸初期に黄蘗宗が中国から伝来した。

臨濟宗寺院は市内に六ヶ寺あるが、日撫の楊岐院は江戸期に入って庵として出発したものであり、残る五ヶ寺はどれも中世以来の元寺もとでらの系譜を引いていて、その中で四ヶ寺が神美地区にある。市内に現存している、あるいは存在していた曹洞宗や黄蘗宗寺院は、後述のように一、二を除いて近世に入って他宗派の元寺の名跡を継いで成立したものと見られ、中世末までの禪寺は神美地区に臨濟禪だけが存立していた観を呈していた。

禪宗は南北朝を過ぎると、室町幕府の保護と統制下に立ち一種の官寺化した五山派と、独自に地方布教に主力を注いだ林下派の二大門流が生じた。応仁の乱後、林下派が目覚ましい発展をとげ、市域の禪宗もこの傾向に沿って展開したものである。

五山派と大 三江地区の大字・祥雲寺には祥雲寺という寺があった。偽書雲山祥雲寺 であろうが建久元年（一一九〇）の『但馬神社燈明記』に「某ノ神社別当・祥雲寺」という名が見えるので、祥雲寺は初めは、この地に鎮座していた神社の神宮寺で、しかも粗末な堂舎であったらしい。この祥雲寺が禪寺となるのは、五山派の僧・古碓こすゐによる。

古碓は、別に祥雲・三江・布里とも呼ばれていた。祥雲は寺号、三江は祥雲寺のある地名である。古碓については「但の旧業に久しく寓す」とも

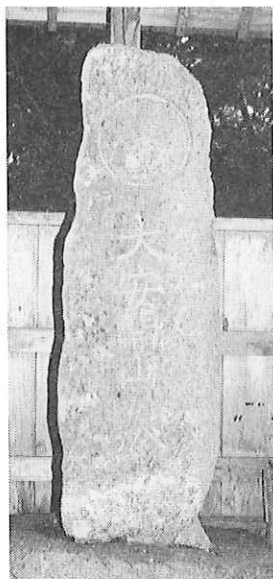
述べられていて、「旧業」とは郷土の寺院のことであるから、古磻は但馬出身、それも三江の生まれであろう。

三江の地は、初め京都の松尾神社領で康暦元年（一三七九）、將軍・義満によって夢窓派の禪僧・春屋妙葩みよはに与えられ、妙葩はこれを自ら開山となった洛西の宝鐘寺に寄せた。この縁によってか古磻は夢窓開山の相国寺に入り、將軍・義教が相国寺を訪ねたとき給仕役を勤めて義教の知遇を得た。しかし、少なくとも文明四年（一四七二）から明応年間（一四九二〜一五〇一）にかけて、応仁の戦乱をさけるとともに、五山僧が名利にこだわるのに愛想をつかして、古磻は祥雲寺に帰ってきた。そのとき古磻の年齢は「中威」と記されているから、三、四〇代の働きざかりであったろう。

彦龍、古磻 相国寺法住院の彦龍けんりゅう周興は、夢窓国師の祖業を担うものは古磻しかいないと、京都へ呼び戻すたを訪う 使者として祥雲寺へ来た。文明十四年五月のことである。古磻は弟子・彦龍を高賓の礼をもつ

て迎えたが、帰京することを承知しなかった。翌年三月、彦龍は再び来但し、再び上洛要請を断わられた。文明十八年にも彦龍は来た。

このころになると「但の茅舎」と表現された祥雲寺の改修が進められ、その壮麗は但山、但水の間に映耀したといわれる。祥雲寺が伽藍を整備し、百色一新を呈したのは、古磻に帰依する外護者があったればこそと思われる。それは守護の山名か、あるいは垣屋であったかも知れない。明応八年（一四九九）、山名宗全の孫で山名弾正の弟の子である礼部が、垣屋の養子となって積門に入り、古磻の拜塔の喝食となっているからである。古磻の法系は、永正十年（一五一三）ごろまで但馬に残ったらしい。江戸時代になって、祥雲寺の故地の麓に祥雲寺の山号・大雲山を継承して万休庵が建った。今の万休寺である。



(上) 写125 盛重寺(森尾)
(左) 写126 大安寺・大機の碑(長谷・大安寺跡)

大応派と豊 但馬守護・山名の家祖である山名時氏
岡の臨濟禅 が五山派に帰依していることや、山名と
祥雲寺との関係から、但馬守護家は五山派に傾倒して
いたように見えるのに、山名が開基の但馬禅系寺院に
は五山派の僧が参加していない。むしろ、林下派によ
って但馬禅宗界は活況を呈してくる。

時氏の子で但馬・山名の開祖・時義と、その子の時
熙は五山の文雅洗練の禅風を好まず、林下・大応派の
名哲・月庵げだん宗光に帰依した。月庵が大明寺(生野町)・
円通寺(竹野町)・大同寺(山東町)を開創したのも、
時義・時熙の援助による。但馬では、この三山を中心
として林下・大応派が展開、市域では特に神美地区に
集中した。円通寺三世・大機は、大安寺(長谷)・宝
勝寺(倉見)・盛重寺(森尾)を時熙の援助で開基し
応永十八年(一四一一)七月、大安寺で死んだ。その
墓と伝えるものが、長谷にある。

文明十八年(一四八六)、生野・大明寺の宗光一〇〇

年忌に大安寺は参列（『大同寺文書』）しているが、天正八年（一五八〇）の秀吉征伐で庇護者・山名を失って廃れた。その仏像は大機が中国の徳山寺から持ち帰ったものと伝えるが、沢庵和尚が正保三年（一六四六）に出石の宗鏡寺に移した。享保十七年（一七三二）に長谷村庄屋・善兵衛が再興を願い出たときは、わずかに祖塔石礎を残すだけであったという（『香住部落文書』）。

盛重寺は清峯山千眼寺の系譜を引くといわれ、大機の再興後、やはり山名の没落とともに衰亡、元禄年間に平井若狭守盛重によって復興され、その縁で「盛重」寺と改めたという。

宝勝寺は、平安中期の陰陽家・安部清明の結んだ小庵に始まると伝え、大機が再興したが、現在の本尊は大機開基の年を一〇〇年降る延徳三年（一四九一）の造仏で、江戸時代の寛文年間に復興された。

永平寺系の
 曹洞宗 区域内の曹洞宗の展開も、林下派の力に負うもので、初めは永平寺（福井県永平寺町）系によって、ついで丹波の通幻派によって行なわれた。

永平寺系と伝えるのが、下鶴井の長松寺・山本の乗雲寺・野上の帯雲寺で、すべて田鶴野地区にある。

帯雲寺は、寺伝によると六〇〇年ほど前、港地区の畑上にあった天台宗・神通寺を、加賀国の大乘寺六世・桂岩英昌が曹洞宗に転宗させて帯雲寺を開創、その後野上に移したものである。加賀の大乘寺は、もと守護・富樫氏の庇護下に開基され、後に永平寺の僧を入れて禅院となったものである。

乗雲寺は帯雲寺地中の一乗院・竜雲院が、明治に入って合併、山本の地へ移ったものである。

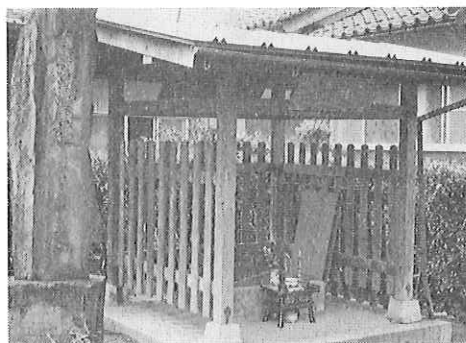
長松寺は、一四〇〇年ほど前の法楽僧都の留錫に始まる古跡を、永享元年（一四二九）に若狭國小浜の妙徳寺の竹堂慧嚴えいげんが復興、曹洞宗に転じたと伝えている。



写127 養源寺（現在の本堂）



写128 法華宗真門流本山・本隆寺（京都市）



写129 日真上人うぶ湯の井戸
（九日市中ノ町字御屋敷）

田鶴野地区や港地区は加賀や若狭から永平寺系の曹洞禪が浸透していたことをうかがわせる。通幻派と豊岡の曹洞宗（通幻派とは丹波の永沢寺（三田市）開山・通幻寂霊の法灯を指すもので、法孫・笑中法俊が円通寺（氷上町）を開基している。この永沢寺・円通寺の教線が北進して市域に及んだのは近世初頭のこと、丹波に通幻派曹洞禪が成立してから二〇〇年を経過している。大応派の臨濟禪の十五世紀の展開からみると、普及の立ち遅れが目立つ。

市域の曹洞禪の中核は養源寺（元町）で、円通寺から天室育敵を招いて開山とし、南州存浦を二世中興とし

て天台宗養寿院を復興したものである。

日真と法華宗

現存する市域の日蓮系寺院は六ヶ寺で、二ヶ寺が一致派（日蓮宗）、一ヶ寺が勝劣派（法華宗）で、他の三ヶ寺は日蓮正宗および本門仏立宗の新興教団に属する。

但馬には勝劣派寺院が五ヶ寺あり、五ヶ寺とも日真門流（法華宗真門流）で本隆寺を本山としている。本隆寺派の開祖となったのが、すでに触れた日真である。

城崎温泉の曼荼羅湯は、日真が晩年、山陰教化のとき法華曼荼羅一幅を認め熱湯に投じて、適温の湯としたと伝えている。

日真の出生や行跡は『兵庫県史』³に詳しい。

「日真は文安元年（一四四四）に城崎郡九日市（豊岡市）の山名氏の居宅に生まれた。父は権大納言・中山親通、母は山名時義の女である。六歳にして山名氏の菩提所・妙境寺（現・妙経寺）に入り日全に師事したが、十八歳のとき叡山・三井寺に遊学し、文正元年（一四六六）二三歳で京都・妙本寺（妙顕寺）に入り宗義の研鑽に従った。当時の妙本寺は日具の代であるが、剛毅な山名時義の血をうけつぐ彼は、日具の折衷的な一致義の学風にあきたらず、しだいに勝劣義に関心をもつようになり、本能寺や妙蓮寺に出入りし、とくに妙蓮寺日忠と親交を結んだ。四二歳、文明十七年（一四八五）には『観心本尊抄見聞』（二巻）を著して碩学のほまれ高く、「古学広知」（『日像門下分散由来記』）の学匠とうたわれたが、長享二年（一四八八）夏、同宿講において一致派の泉乗坊日儼らと論争し、決着がつかず、備中野山に隠栖中の日具に書を呈して自説が受け入れられないのを知ると、延徳元年（一四八九）ついに同志一〇余人とともに妙本寺を退出して別に四条大宮に一寺を建

立した。これが本隆寺の独立である。ときに日真四六歳のときであった。(中略)

但馬は日真の生地であるが、直接彼の布教は行なわれなかったらしい。しかし、日真が妙本寺を退出したさい、彼と行動を共にした本弟子のひとりに「但馬ノ三位房」の名が見え(『日像門下分散由来記』)、但馬出身者と推定されるなど、日真門流の末寺が開かれる所縁は充分にあった。日真の出家剃髪した豊岡市九日市の妙境寺は、その後妙経寺と名を改め、真門流の末寺となり、周辺に養父市場の養徳寺以下数ヶ寺の末寺を分出した。

折伏転宗

法華宗寺院の開宗に当たっては、折伏しやくふく伝説をもつものが多い。「折伏」とは日蓮宗系布教の一手段で、他宗のものに宗論をいどみかけ帰依させるもので、戦闘的なものであった。妙経寺も、折伏で改宗した寺であったという。

寺伝によると妙経寺は、もと真言宗・万代山金胎寺といい、但馬守護・山名の菩提寺で七堂伽藍に八町四方の境内と塔頭十一ヶ寺あった。康永元年(一三四二)のころ、住持・祐存坊日漑が上洛して、日蓮宗・妙顕寺の大覚大僧正の法華経の説法を聞いて、恐らく折伏の結果、転宗したという。

日漑は、日真の母の父である山名時義の弟と伝える人で、日真には大叔父になる。日漑・日全・日真と法統が続き、妙境寺を妙経寺と改めたのは日真だという。妙法蓮華経の宗祖・日蓮の法義を正しく承ける寺であることを主張したものであろう。

九日市上町にある勝妙寺も、折伏を受けて転宗したと伝えている。勝妙寺は、現在は妙顕寺末の一致派日蓮寺院であるが、もとは真言宗で応仁年中(一四六七〜六九)に勅持院日宣上人が折伏したという。



写130 立正寺祖師像台座裏の書きこみ
慶長拾稔(年)九月十三日・立昌(正)寺と
ある。日永は同寺開山

中央町の立正寺は立本寺末の一致派で、創建については、次の諸説がある。

- ① 立本寺の住持・善性院日永が立本寺を辞して天正末年に立正寺を創建、在住一〇余年の後、寺を弟子の日恩に譲って四方に巡錫、寛永十五年(一六三八)に丹後国網野町の本覚寺で示寂した。
- ② 丹後国久美浜の妙光寺を日永が天正年中、豊岡に移した。
- ③ 日永は出石の出身で、久美浜の妙見寺から、

出石の本高寺に移座、このとき信徒の要請で本高寺内の立正坊を豊岡に移した。

④ 元和五年(一六一九)、日永が創建。ただし、右の写真の年号は、この説を否定することになる。いずれにしても、近世初頭の日永の布教の結果によるものといえよう。

第二節 農村と神社

九日市場の室町時代に入って社寺参拝の風潮が高まって、紀州の熊野詣もさかんになった。熊野詣にかぎらぎわいらず、参詣の信者の世話をするのが先達で、霊山・霊地で先達が世話した参詣人を受け入れるの

が御坊であった。先達や御坊にとって参詣人は金の卵であって当時、旦那と呼び慣らわし、御坊の間では各地の先達が率いてくる旦那の組織を旦那株といって、売買や譲渡の対象にした。

『兵庫県史』³は、熊野の那智神社の旧社家に伝わる文書に基づいて、兵庫関係の旦那一覧表を作製している。それによると、但馬では永徳二年（一三八二）から慶長四年（一五九九）にわたる約二〇〇年間に旦那株の売買または譲渡が九回あり、うち二回は市域に関係している。

永徳二年に譲渡された旦那株中には、但馬国九日市場の金屋入道の旦那株と、同じ九日市場・網屋入道の旦那株がある。文明十九年（一四八七）には、但馬国木の崎・泉水房門弟の旦那株と地下一族分が本銭返しとし

表29 『熊野那智大社文書』に見える但馬国の旦那一覧

年	代	旦那呼称 (要項)
永徳二	(一三八二)	但馬国一宮先達引旦那・同国一足三礼先達門弟引旦那・同国九日市場金屋入道引旦那・同所網屋入道一円(譲状)
応永一一	(一四〇四)	但馬国旦那一円(売渡、二貫五〇〇文)
応永三二	(一四二四)	但馬国旦那一円(売渡、一四貫五〇〇文)
文正一	(一四六六)	但馬国せぎの地下一族一円(売渡、五貫文)
文明一	(一四六九)	但馬国一円、太田垣名字地下一族(売渡、一二貫文)
文明二	(一四七〇)	但馬国先達旦那之引、長之一族(売渡、三貫文)
文明二	(一四七〇)	但馬国一円、但十カ年(本銭返、三貫文)
文明一九	(一四八七)	但馬国木の崎泉水房門弟引旦那、地下一族共(本銭返、一〇貫文)
慶長四	(一五九九)	但馬国一國一円(廓之坊旦那帳)

(『兵庫県史』より)

て一〇貫文で売られている。

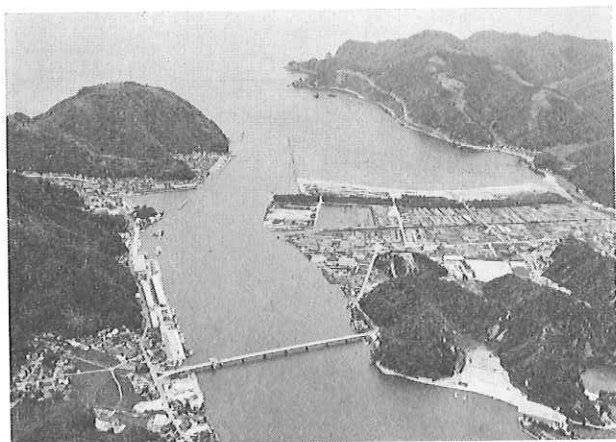
九日市場というのは現在の九日市のこと、木の崎というのは神武山を中心とする一帯であろう。このような先達たちは、九日市場のにぎわいをふまえて、恐らく九日市城を拠点とする山名や家臣団、または九日市場で財をなした有力土豪などを旦那としていたと思われる。地下一族分とあるので、このような旦那衆の支配下にある農民層まで旦那株の対象に繰りこんでいることが知られる。熊野信仰の層が、底辺にまで広がったのである。

九日市という言葉のとおり、ここでは九日・十九日・二十九日と月三回、市が立った。西方の山なみの九日市城の城下町として発展したもので、応仁の乱のころ京都の相国寺の僧が珠光青磁の茶碗を九日市場で見つけ、これが茶器名物となったと伝わっている。近くの農民の生産物だけでなく、遠来の産物も将来され、取引きされていたらしい。

山名政豊が因幡・山名の支援の戦闘から凱旋したとき「九日市城下の前には船の柱が林立し、紅や青の軍旗が夕映えに輝いていた」と、祥雲寺の古碁を訪れた彦龍はその模様を詩に残しているから、市場は円山川沿いに形成され、そこには多くの物資輸送の船がひしめいていたのである。

津居山関

但馬守護・山名持豊が京都で西軍の将として応仁の乱に関わったのは、応仁元年（一四六七）のこと、この年に源国吉が朝鮮に遣使して朝鮮・円覚寺の舍利分身を賀せしめたという。朝鮮の申叔舟の『海東諸国記』は、朝鮮から見て海東、つまり日本や琉球の国情・日朝通交の沿革・使人接待の規定などを記したもので、応仁元年から四年後に成定されたものであるから、国吉の遣使は生なましく記録されて



写131 空から見た現在の津居山港と気比の浜

津居山関の当時は、気比の浜もなく山ぎわまで波が打寄せ、瀬戸地区も深い入江であった。(近畿地建豊岡工事事務所・提供)

いることになる。但馬と半島の間の、海を介しての密接な交渉がうかがわれる。

源国吉が称していた佐々木氏は中世の近江の豪族で、その系は数十家に分かれていた。『但馬国太田文』には朝来郡の西明寺と法興寺の地頭に佐々木信濃四郎左衛門尉秦義の名が見え、鎌倉時代の初めに出石郡の御家人に雀岐ささき助景が知られ、これより後、持豊の特使として応仁の乱終結の和平提示を西軍諸将に取りついで五人の重臣の一人に佐々木がある。

源国吉は遣使の書状に「但馬州津山関佐々木兵庫助源国吉」を称したが、「津山関」とは津居山の関所のことである。「関」とは軍事目的で設けられたものが、南北朝のころから財源に悩む守護大名や、庄園を侵された庄園領主が交通の要所に関を設置し、関銭を賦課するようになったものである。津居山は、円山川河口という要衝に位置するところから、関所に選択されたものであったろう。国吉は在地の有力豪族としてというよりも、但馬守護・山名の被官として、その権能を代行していたのかも知れない。恐らく朝鮮特使派遣に任せられるだけの、山名の家臣であったろうか。

円山川河口部は、先に元寇に脅える鎌倉幕府が守護領に指定した重要海岸地帯であったが中世以来、日本海航路上の交易中継点としての重要性を増してきていた。

津居山の照満寺『由緒記』によると、国吉の末葉・佐々木佐兵衛督源広吉が出家して真言宗寺院の住職であったのを文明十年（一四七八）、浄土真宗に改宗して浄信と名乗ったとしている。しかし、応仁元年（一四六七）に登場する国吉の「末葉」が、文明十年（一四七八）の広吉だというのは、系譜が不明のままでは年代的にそぐわぬ面がある。

灘千軒

市域には、「福井千軒」「久々比千軒」「灘千軒」「安井千軒」と呼ばれる地域が伝えられている。「千軒」とは人家の稠密を表現したものであるが、いつのころ人家の集中化があったものか不明で、これらの伝承地域には当時のにぎわいを示す痕跡も残っていないので、その興亡のいきさつもわからない。「福井千軒」は、岩井川と奈佐川の合流点付近に成立していたらしい。近くの山中は、養寿院・自性院・中寺の三ヶ寺が建立されていたところである。

「安井千軒」は、奈佐川と宮井川の合流点付近らしく、奈佐川をはさんで「福井千軒」とは対称的な地帯である。宮井の小字に「市場」があるのも、「安井千軒」と関連があるのかも知れない。

「久々比千軒」は、三江地区の久々比神社付近に成立していたのではなかろうか。

これらに対して「灘千軒」には悲劇的な終末が伝えられている。「灘千軒」は円山川と奈佐川の合流点付近から城崎町の二見・上山付近にかけて存在していたものらしい。

『内川村誌』や『耳ぶくろ』によれば、この地帯は二見山玄武岩山麓の豊岡累層および新火成岩の石英粗面岩

地の風化地帯で幾条もの舌状丘陵が円山川に迫り、狭い山田を区切る地域である。しかも土地湿潤で、江戸期においても「ナダの悪路」と呼ばれ、伝説にいう市場・商業町としての立地条件は考えられない。昭和五十一年十一月に実施された埋蔵文化財調査でも、「灘千軒」の証拠は発見されなかった。しかし、旧・内川村では「灘千軒」にまつわる、少なくとも六種の伝説を伝えており、「灘千軒」の存在が、あなたがち絵空事であるとはかりは考えられない。

円山川は古来、洪水をくりかえしつつ、その蛇行する流路を変えてきている。中世のあるときの大洪水が豊岡平野に氾濫し、瓶のクビにあたる「灘千軒」の地を一気に押し流して、今日の流路に移ったのではなからうか。もし「灘千軒」の存在を肯定するなら、それは現在の円山川水路の底に眠っていると仮定するしかない。

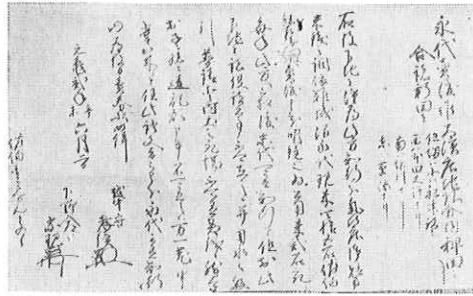
農業の発展

地域の大字・小字には、経済活動に関係があるものが存在している。

塩津は神美地区三宅の塩津同様、塩の集積に関係し、神美地区奥野の土師谷・鍛冶屋は土器や農機具製造に関係していたらしい。鍛冶屋は神美地区市場にもあり、この「市場」は奈佐地区宮井の市場と同じく、商品の流通に関わったことであろう。九日市場の名は、すでに触れたとおりである。

一日市という地名は近世の初見であるが発祥は、それ以前に溯るもので一日・十一日・二十一日の月三回開かれた三斎市に関係する。これらの市場で扱われた流通商品の具体的な品目はわかっていないが、余剰農産物や農閑期の消閑作業として取り上げられた容器や布製品が主体であったと思われる。

このころ農民が負担した貢納の額は不明であるが元亀二年（一五七一）、佐伯孫左衛門が購入した田地に関して次のような記録がある。



写132 元龜2年の大浜庄新田永代売渡し証
(佐伯昌氏藏)

元龜二年六月二日、越中守孝統・下野入道宗現の二名は所有する大浜庄地所分のうち、稗田と諸新田を氣比庄賄方米錢代資金調達のために、現米・四五石で佐伯に売った。公用米として毎年、二石ずつ売主に提供すれば、この地所にかかる諸役・諸公事を免除し、用水の懸引きや普請などのときに土の取場となるようなことをしないとという条件であった。

元龜二年のころは、垣屋の勢力が伸びて山名政豊と対立していたときで、売主の越中守孝統・下野入道宗現の苗字は不明ながら、売券にしっかりと花押を書いているので、山名家臣団の中でも上位の人物らしい。大浜庄とは、大浜川流域の森津・滝・新堂・岩熊・江野・伊賀谷の地域と思われるが、この中には稗田という小字はないので、その位置は特定できない。氣比庄賄方米錢とは具体的にどんなものかはわからないが、少なくとも農

地所有者に課せられた公事であることは確かである。また、当時の農事慣行として用水の水取りは当然であるが、普請用に田畑の土が利用されたことがわかる。

玉石新田

綿屋（保田）勘左衛門は、家伝によると早くも正平二十三年（一二三六）には豊岡の地に住み、船を作って航海の業に従事、天正二年（一五七四）五月には小二見で新田高四七石余を開発している。小二見は現在、城崎町域であるが、現在は福田地区に入る玉石島地域が当時は所属していたらしい。詳細は第二編にゆずる。



写133 大隅玄番屋敷免許(免税)状 天正9年に宮部継潤(善祥房)が鈴木三郎左衛門に与えた。(市指定文化財・河本幸雄氏蔵)

新田開発は、低平で地質学的に充分に乾固していない豊岡盆地では、大事業であった。綿屋の新田も開発後、七〇年経過した慶安二年(一六四九)から承応二年(一六五三)の間に、塩入りのため収穫皆無の年が二ヶ年もあったという。鈴木三郎左衛門が開発の功を賞せられたのも、開発の経済的効果が買われたためであろう。当時の農産物が、具体的にどんなものであったかを示す在地の資料はない。しかし、土地によっては二毛作が行なわれ、小麦なども作られていた。

天正九年(一五八一)に鳥取城攻囲軍に加わっている豊岡領主・宮部善祥房の慰問に出かけた豊岡商人の中に、油屋・切麦屋・味噌屋の屋号を持つものがいた。これが生業を示しているのなら、油からは菜種を、味噌からは大豆を、切麦(素麺)からは小麦を、それぞれ農産物として推定でき、さらに二次生産品が商業的に扱われていたことがわかる。

重要文化財 中島神社・酒垂神社・久々比神社は、いずれも円山川右岸域に鎮座する神社で、古くから齋き祀られていた式内

社である。その建て方は流造ながれづくりといって、屋根を側面から見ると後方は短く、前方の軒先が長く流れ下っている。

神を祀る部屋を間まといい、奉祀する神の数によって間数がちがってくる。酒垂神社は一間、中島神社は二間、久々比神社は三間で、同じ流造といっても、その規模は異なる。

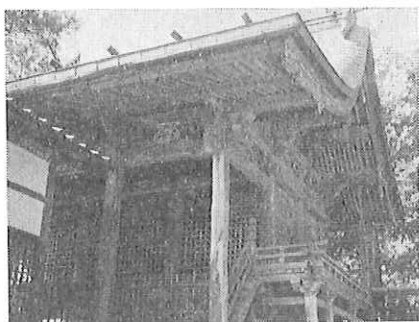
建造年代も、中島神社が正長元年(一四二八)、酒垂神社が文安元年



写134 中島神社の社殿（三宅地区）



写135 酒垂神社の社殿（法花寺地区）



写136 久々比神社の社殿（下宮地区）

（一四四四）と接近し、久々比神社もそのころのものと考えられている。中島神社建造に関わった大工の大伴半太夫久清は、酒垂神社を造った伴大夫大伴久清と同一人らしく、両社は同一の大工によって建造されたものと見てよい。

修理の時期も、中島神社は元禄十三年（一七〇〇）、酒垂神社は宝永六年（一七〇九）、久々比神社は正徳元年（一七一二）と、わずか一〇年間に集中し、さらに酒垂神社と久々比神社は同じ棟梁によって修理が行なわれている。

大伴久清という大工の苗字・大伴は、今も三江地区に分布している大伴姓と関係があるかも知れない。江戸時代に入って修理を担当した藤原勘右衛門は、明らかに下宮の人であった。その修理技術は優秀で、原形を損

うことなく修復しており、この三社の建築は室町時代の典型的な神社建築を伝えるものとして、国の重要文化財に指定されている。

この三社が集中的に建てられたころ応仁の乱が起こり、やがて戦国時代に入る。酒垂神社の場合、永享十年（一四三八）に斧始め、嘉吉元年（一四四一）に立柱、文安元年（一四四四）に遷宮、体裁を完備したのが宝徳元年（一四四九）で、前後十一年をかけている。調達できた資金量に応じて、少しずつ工事が進められていくように、鎮座地の法花寺地域の住民が、一つの目標に向かって共同体としての連帯感をかきたてられていたればこそ、その完成が可能だったのである。

『兵庫県史』3が記す、これら三社の建築史的価値は、次のとおりである。

「(酒垂神社) 一間社流造、身舎側面一間、浜縁付。庇に後補があるが、身舎の部分はよく保存されている。

細部としてとくに目につくのは、かえるまた 幕股であろう、全部で四個。脚内の彫刻は、左右相称の植物唐草だが、すべてが図柄を異にしているのを注目すべきである。それも大別すると、

- 一、幹が脚のやや下方から分かれて中央に向かい、やや上昇して交叉し、上に花化した中心飾をもつもの
- 二個



写137 酒垂神社
の棟札

- 二、幹が中央下からでて、左右に枝を出し、上に花化した中心飾をもつもの
- 一二個

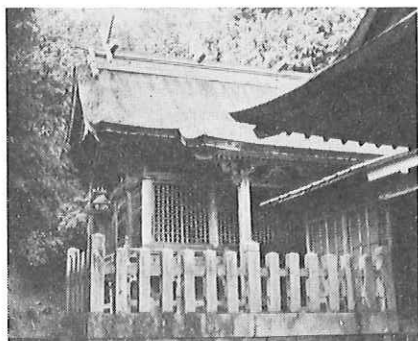
の二類となる。前者は伝統を踏まえたもので、文字通り図案的だとすれば、後者は新しい形式で、図案的な構成のなかにも、写実的な傾向をもつものといえる。そしてそこに自然に対する意識がはっきり目覚めてきているのを見る。これは歴史的なもので、「伝統の論理」が弱まろうとする時代に生きた中世人の自然に対する感受のひとつの新しい姿であったと思う。このように細部を技巧的に意識してくるのはこのあたりからである」。

〔中島神社〕二間社流造、身舎方二間、内部は内・外陣に分け、内陣は二間とも扉構だが、内には間仕切をつけない。向拝は中柱を抜いて通一間としているが、もと二間であったおもかげを残している。すなわち、中央にも出三斗を組み、内に庇繋として手挟を構え、中備に本殿同様の本臺股を置く。ちなみに側柱のつなぎは海老虹梁である。

向拝・縁廻など一部に後補はあるが、他はあまり改変の跡は見られないようで、各細部は室町中期の特徴をよくあらわしている。その絵様彫刻がこのように複雑なものも珍しい例といえる。

二間社流造としては、大阪府建水分神社両脇殿（建武元年、一三三四）につぐもので、二間社流造であるというだけでなく、庇が通一間であること、庇の中央に出三斗を組んでいること、庇繋が海老虹梁・手挟である点など、庇の扱いにもよく似たところがあるが、後者の方が手法が簡素であり、一世紀のへだたりをまざまざと示している」。

〔久々比神社〕三間社流造、身舎側面二間、浜床・浜縁付で正規の平面構成をもつ。（中略）庇繋の工法だが、外が繋虹梁で、内が海老虹梁になっている。妻飾は二重虹梁大瓶束式、墓股は「身舎について見ると、一〇個あるが（向拝のすべては後補）、脚内彫刻の形式によって分類すると、



写138 雷神社の社殿 (佐野地区)

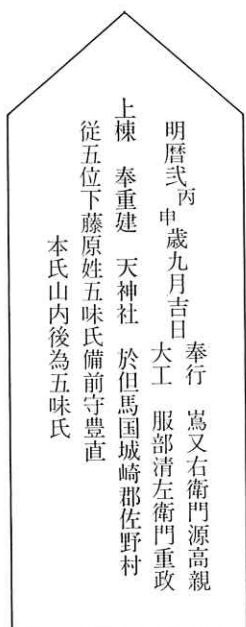


表30 雷神社棟札

A 左右相称で図案的な構成をもつもの

a 前記酒垂神社の(一)類の系統に属するもの一七個

b 前記酒垂神社の(二)類の系統に属するもの一三個

B 左右相称の崩れたもの一一個

の二類三種となる。だが、こう並べて見るだけでははじまらない。この神社の墓股を見るにあたって肝腎なのは、酒垂神社との違いで、後者にくらべて、(a)の構成がより繊細複雑になり、また(b)の図柄もより写実的になり、さらには非相称形の(B)さえがでてきた点である。そこにまざまざと六四年のへだたりを感じ取られるように思うのだが、これは果たして勘ぐりにすぎないのであるか。

佐野の雷神社本殿は江戸時代初期の建造物であるが、豪壮であり保存も良いので、兵庫県の文化財に指定されている。



写139 “正一位県大明神”の小田井
 県神社本殿の額
 年号は入っていないが、かなり古い。

雷神社の記録（佐野・信部脩氏藏）によると、康永二年（一三四三）に建立した本殿をとりこわして、明暦二年（一六五六）に新殿を建築し、そのとき前表の
 ような棟札があげられた。

五間社流れ造り・向拜付き・檜皮葺き、身舎は丸柱を建て、二重虹梁の上に妻組みされているが、向拝や組み物・蕪形の大瓶束など室町時代の特色をよくとどめている。

山名氏と小 妙楽寺・三坂寺・正法寺の三ヶ寺が小田井社の供僧として「祈禱の忠節致す旨、言上」したのは、田井社 康暦元年（一三七九）九月のことであるという。同社の供僧は金剛寺を加えて四ヶ寺といわれるが、金剛寺加入の時期は不明である。

明徳の乱後、但馬を本拠とする山名時熙が小田井社を敬信してその結びつきを強めるのは、明徳三年（一三三九二）一月二十五日のことである。時熙は、同社地頭職に菅原道真の真蹟・太刀・神馬などをそえて寄進し、同年中に本殿を造営して再興をはかったという。このことは、小田井社は守護大名・山名氏の領国経営を補完するという重要な宗教的役割りを担わされていたことを意味する。

十五世紀後半には、山名氏の娘が神主に嫁して三十六世神主・大石修理進秀誠を生み、秀誠には山名家臣団の田結庄氏が、その子には宇津氏が嫁すなど、血縁的にも関係は深まった。

こうした経過は恐らく、当時の守護勢力が在地支配を深化させるために、有力社をとりこむ目的で結ばれた典型的な血縁関係の拡大を示すものであったろう。

永正十五年（一五一八）は小田井社式祭の年で、主要神事の一つの舞会の当番を勤める社僧の決定を山名が指示している。舞会は神前で神を寿ぎ、豊作を祈願して舞童が舞いを奉納するもので朝廷でも「建保六年（一一一八）七月二十三日、天台座主、相具舞童、参入」（『百鍊抄』）とあるように密教系寺院が主導する五穀豊穰を祈念する農耕神事であった。

同年二月四日、山名は舞会担当に正法寺を推し、二十一日には今回の舞会は三坂寺が当番であるが昨今、無力であるから余儀なく正法寺にまかせるよう重ねて催促した。三月二十四日、小田井社は了承の回答をしたが、二十六日には山名祐豊が直接、正法寺を推してきた。舞会当番決定に見る、この執拗さは式祭および舞会神事の、当時における政治的・宗教的重要性を物語るものであり、同時にそれを舞台裏で管掌してゆく守護・山名祐豊の政治的意図を表わすものではなからうか。神社と守護の結びつく現実的一面をうかがわせる。

式祭を中心とするこの年の両者の関わり合いには、式祭を小田井社復興の契機としようとする意図を汲みとることができる。

円山川に社地を接する小田井社は、洪水のたびに被害を受け、そのつど再建の外護を山名に仰いでいるが、このころの山名は垣屋との対立や播磨への進出に没頭し、小田井社だけをかえり見る余裕が途絶えがちであったにちがいない。

同年七月二十三日、舞会の前提を整える意味もあつたらうか、小田井社は社中諸式の定めを制定、山名誠豊

が袖判そでまきして社領安堵状を与えた。八月二十六日、祐豊から田結庄右馬之助秀親に社頭大破といえども寄進社地の分与を禁じ、二十七日には田結庄が再建に努めるよう返書しているのを見ると、小田井社在所を管掌する田結庄が直接、神社復興の責を負わされていたものようである。十二月十九日には誠豊から神主・秀誠へあて山名一統が祭礼に努めるように書状を与え、一族・家臣団の寄与を保証している。

天正三年（一五七五）、田結庄氏滅亡のとき小田井社の社殿は焼亡、社領も失われ小田井社の中世的存在意義の役割も消滅したのである。

山名氏と転

既述のように福成寺と地中二ヶ寺が出石へ移ったのは、出石に本拠を固めた山名氏の庇護を求め出寺院 たものといわれる。出石町魚屋の日蓮宗本高寺（本光寺）も、かつて市内の船町にあった。同

寺の縁起によると、康正元年（一四五五）に鎌倉・妙本寺の日会にちえが創建したもので、延徳三年（一四九一）に全山焼亡し、まず出石・此隅山麓に転じたというが、『校補但馬考』では年度は、それぞれ永享十二年（一四四〇）と文明五年（一四七三）になっている。

船町で九ヶ坊の支院を数えたというから、創建当初から有力な外護者に支えられていたことになるが、それがだれであるかは不明である。しかし、此隅山城下に移ったということは、明らかに山名氏に復興を託したものであろう。

出石町松ヶ枝の曹洞宗見性寺もまた、市内ににあった。庄境村出身で日撫の旧・正福寺で僧となった直翁玄旨が天正三年（一五七五）三月、庄境村と鎌田村境の字和尚に庵を結び、後に出石郡田多地村に転じた（『浜家文書』）というが、この場合の外護者は土地の富農であった。